

第147回 日文研フォーラム



近代詩における擬声語について

Onomatopoeia and Its Rhetorical Use
in Modern Japanese Poetry



マシミアアーノ・トマシ

Massimiliano TOMASI

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

近代詩における擬声語について

Omomatopeia and Its Rhetorical Use
in Modern Japanese Poetry

● 発表者 ●

マシミリアーノ・トマシ
Massimilano TOMASI

ウェスタン ワシントン大学準教授

Associate Professor, Western Washington University

国際日本文化研究センター 外国人研究員

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies



2002年2月12日 (火)

発表者紹介

マシミアーノ トマシ

Massimiliano TOMASI

ウエスタン ワシントン大学準教授

国際日本文化研究センター外国人研究員

Associate Professor, Western Washington University

Visiting Research Scholar, Int'l Research Center for Japanese Studies

略歴

1989年 9月 フィレンツェ大学教育学部卒業

1993年 3月 名古屋大学大学院文学研究科修士課程修了（日本語文化）

1997年 3月 名古屋大学博士

1997年 9月～現在 ウエスタン ワシントン大学日本語科準教授

著書・論文等

1. 「明治大正時代の日本の修辞学研究における擬声語の位置付けについて」
単著 1994『名古屋大学人文科学研究』第24号 41-53頁
2. 「近代日本における修辞学研究の特質－その一つ西洋修辞学変遷の再現」
単著 1994『国際日本文学研究集會會議録』第18回 91-108頁
3. 「大正時代の修辞学研究－明治時代の修辞学研究を背景として－」
単著 1994『ことばの科学』第6号 23-37頁
4. 「島村包月における修辞採否の問題」
単著 1995『日本文学』第44巻第2号 23-37頁
5. 「明治時代の修辞学研究における修辞採否の成立問題－江戸の国語学者の言語感との接点について－」
単著 1996『名古屋大学人文科学研究』第25号 141-150頁
6. 「自然主義における修辞採否の問題－田山花袋の場合－」
単著 1997『ことばの科学』第9号 119-129頁
7. “Quest for a New Written Language: Western Rhetoric and the *Genbun itchi* Movement,” in *Monumenta Nipponica* 54. 3 (1999), pp. 333-60.
8. “Studies of Western Rhetoric in Modern Japan: The Years between Takada Sanae’s *Bijigaku* and the Turn of the Century,” *Journal of the Southwest Conference of Asian Studies*, vol. 2 (2000), pp. 145-67.
9. “Rhetoric as Metalanguage and the Metalanguage of Rhetoric: How Language Defines and Is Defined in the Works of Rhetoric of the Meiji and Taishō Periods,” *Acts of Writing*, PAJLS 6 (2001), pp. 220-35.
10. “Oratory in Meiji and Taishō Japan: Public Speaking and the Formation of a New Written Language,” *Monumenta Nipponica* 57: 1 (2002), pp. 43-71.

はじめに

明治維新以降、日本の文章表現が変遷していくにつれて、様々な古い要素が捨象され、また一方で新しい要素が導入されていった。このことは、国文学・国語学史上、見逃せない事実である。生活の変化とともに言語も変化し、社会の変化とともにその実態を語る文学的表現も変化することも至極、当然のことと思われる。

これまでの語彙研究においては、「近代文章の変革は語彙を中心になされたといってもよい」（木坂基『近代文章の成立に関する基礎的研究』風間書房、一九七六年、八十八頁）という指摘、すなわち外来語の増加、学術用語の導入、翻訳語の工夫などが国語史や国文学史の観点からして最も目立つ類の指摘と言えよう。しかし、同時に、言文一致研究によって明らかになったように、新文章の成立の問題は、語彙レベルを超えるものもあり、二葉亭四迷や山田美妙、尾崎紅葉などのような作家を起点として日本の文章が文体のレベルでも大きく変遷したこともよく知られている。二葉亭らは徐々に文章に口語的な要素を導入し、言文一致運動や口語体の成立に大いに貢献したが、明治大正時代、新しい文章の成立とともに、どのような新しい文章表現が成立し、または多用されたかという点に関しては、現在なお多くの課題が残されている。

本日は、近代日本文学における文章表現としての擬声語の位置付けを考察する。ここでいう擬声語とは、聴覚を介して感知される現象を模写する擬音語と、動作・様相等の現象を音声象徴によって表わす擬態語とを含むものである。この発表では、近代の文章には擬声語を従来より多用する傾向が見られるとともに、それがどのように口語体への変遷を特徴づけているか、とりわけ近代自由詩を対象とし、代表的詩人による擬声語の使い方を紹介する。

擬声語については多くの先行研究がすでになされ、『源氏物語』及び『今昔物語』、抄物などにおいて、中古文学から中世文学にかけて擬声語の使われている作品が少なくないことは定説となっている。つまり擬声語は中古からすでに広く使用されており、近代文学の特色の一つと見なすことには無理があるようである。そしてこれら先行研究においては次の指摘がなされている。

「擬声語を使用するのは、文の内容を描写するにあたり実に具体的に直接感覚に訴え、しかもそれはまことに簡単な方法でなされる」（寿岳章子『室町時代語の表現』

清文堂、一九八三年、一八五頁）。

「擬声語は學術論文や知的内容の文学作品の中に登場しにくいものであり」（寿岳章子『室町時代語の表現』、一八六頁）、いかえれば「文章語的色彩が濃い文体になればなるほど、存在しにくいわけである」（山口仲美『今昔物語集の象徴詞―表現論的考察―』『王朝』第五号、一九七二年、十三頁）。

「擬態語副詞は、現実描写性を反映して、強い口語性を持つ」（木坂基「論說的言文一致文章の用語法―『真政大意』と『百一新論』の副詞―』『近世文芸稿』第二十二号、広島近世文芸研究会、一九七七年、一一三頁）。

「わが国の文学作品に限って言えば、象徴語の使用は、全体として、昔より今の方が多い」（大坪併治「象徴語彙の歴史」森岡健二他編『講座日本語学』第四卷、明治書院、一九八二年、二三四頁）。

これらの指摘から、描写を特有の手法とした近代文学においては、口語化が進むにつれて、擬声語の使用率も増加していった可能性が高いことがわかる。先行研究では擬声語の口語性や写実性が指摘されているし、擬声語が近代文章表現の特徴の一つと考えら

れることを促すものもある。しかしながら、たとえ明治維新以降の文壇でその頻度が増加したことを実証できたとしても、その理由については未だ明らかにされていない。この解明のためには、近代化をともなった俗語の新しい認識の問題をまず考える必要があらう。

俗語の価値に関する新しい認識の問題

坪内逍遙が『小説神髓』（一八八五〜八六年）の中で写実主義を主張して以来、近代小説の展開を通じて最も顕著に現われたのは、言語表現における写実的傾向である。「この写実的傾向は、ただ叙述形式のみにあらわれた傾向ではなく、表現全体を支配して、これを近代風に特色づけている」（島方泰助『明治小説論』明治書院、一九四九年、三一〇頁）と考える。この写実的傾向に沿って細密な描写と俗語の使用が進むなか、近代文学は新しい社会の現実を描写、表現することとなった。しかし、「近代の口語は、江戸時代において、すでに八文字舎本などのなかに姿をみせている」し、「それは、会話の叙述としてあらわれ」ていた。また、それは「会話に口語を選んだ理由が、会話を現実に行われつつある会話そのままの様態に近く表現しようとする描叙的意図にもとづ

いたものであるということは疑えない」（『明治小説論』三二三頁）のである。つまり、俗語は既に江戸小説に広く登場しており、特に「明治に入つての言文一致運動の効果の早くいちじるしかったのは、江戸時代における俗文の普及していたことが、その一原因であると見るべき」（中村幸彦『近世的表現』〈中村幸彦著述集〉第二巻、中央公論社、一九八二年、一〇三頁）である。

事実、江戸小説の起源を辿ってみれば、仮名草子や浮世草子にはすでに擬声語を含めた口語的な要素が広く見受けられ、当時の口語用法の研究資料として有用であることはよく知られている。また、以降の散文に大きな影響を与えたとされる洒落本や滑稽本も、擬声語を含めて俗語を生かし、近世的内容に応じ得る表現を求めたのであった。結果的に、これらのなかで用いられた俗語は単なる様態の描写にとどまっておらず、「その背後にはおそらく写実型特有の小説言語の法則が埋在しているはず」であり、「常談平語は写実型固有の小説言語として一つの「修辞上の文彩」たりえている」（野口武彦「江戸期小説の言語構造」『言語生活』第三〇九号、一九七七年六月）と言うことができる。すなわち、当時の俗語は文章表現における新しい修辞であり、近世文学から近代文学へかけての移行過程を最も特徴づけている要素のひとつであったのである。

さらに、もう一つの課題がある。それは近代文学特有の表現形態である小説の再定義

である。平安時代以降、雅俗の対立が激しくなると、芸術の一分野と見られていた文学作品では俗語が使われづらくなつた。その後江戸時代に入ると、小説のなかに俗語が取り入れられるようになった。ただ、江戸時代の小説は娯楽のためのものと見なされており、それが本格的に芸術と認められるようになったのは、逍遙の『小説神髓』以降である。明治に入り芸術と認められた小説は、その表現も芸術と見なされ、俗語は庶民の言語の再現だけではなく、新しい現実社会を描写するための一つの有用な手法となつた。そして、その価値について新しい認識を提起し、擬声語のような日常的表現の新しい位置付けを促す結果をもたらした。

近世文学の中には俗語である擬声語が広く使われていた。擬声語は近世の戯作文学などにおいてはすでに特有な表現方法となつていた。そして明治時代以降も写実法の一つとして文章に使い続けられ、やがて新文章の特徴にもなつていったのである。擬声語は、二葉亭四迷、小栗風葉などの写実主義系の作家をはじめ、自然主義系の小杉天外、真山青果、または私小説系統の葛西善蔵等の多くの作家たちに多用された。つまり新式文章への変遷過程を最も反映した表現法の一つなのである。

また、それだけではなく、擬声語が、当時、近代的表現として多くの文章論の中で評価されていたことも見逃せない重要な点である。たとえば、一九一二年の『作文講話及

文範』では、擬声語は事物を具体的に写すことに最も必要なものであり、他のあらゆる修辭を捨てて擬声語だけを十分に使うことができれば、相当な名文を綴ることができる」とされている（芳賀矢一・杉谷虎蔵『作文講話及文範』富山房、一九二二年、一七七頁）。国文学者芳賀矢一によれば、擬声語は、中国の文章あるいは西洋の文章よりも、日本の文章で最も多用され、古来の日本では有名な文学者であれば擬声語を使用しないものになかった等という。芳賀は、無技巧を訴える当時の自然主義の文章では、擬声語だけは盛んに用いられ、国文の長所を發揮しようと思えば是非とも擬声語を使用しなくてはならないとさらに述べている（『作文講話及文範』一八三頁）。

写実主義・自然主義文学の文体における擬声語の位置付けについては、当時、早稲田大学教授の五十嵐力も言及している。五十嵐は修辭学者でもあったが、氏によれば、新式文章では修辭を使わない傾向があったにもかかわらず、擬声語いわば声喩という修辭だけは多く用いられたという（五十嵐力『新文章講話』早稲田大学出版部、一九〇九年、四四〇頁）。同様な指摘が美学者渡辺吉治にも見られた。渡辺は「かかる擬声語は、比喩を工夫する暇のない実生活の会話においても多く用いられます。したがって、また実生活の言語を用いる口語体の現代文に用いられる」（渡辺吉治『現代修辭法要』神保書店、一九二六年、二二二頁）と述べ、擬声語を自然主義の無技巧論に背反しない、実生

活と深いかわりを持つものとして位置付けている。こうして擬声語という言葉表現と、「近代性」という概念との間には新しい関連性が見出されるようになった。明治末期、自然主義を中心とする文壇では、芸術と人間の実生活との関係が求められた。文壇では、形式主義に頼らない、思想と一致するような表現が目的とされた。そしてそれは古い修辞法ではなく、人間の生活の現実に即した日常言語による表現に還元すべきとされた。この意味では、文章が口語体へ変遷する過程で、擬声語のような表現が多く用いられても決して不思議ではなかった。事実、このような傾向は多くの作家に見られた。例えば、森鷗外は、文語文による『舞姫』（二八九〇年）と『うたかたの記』（同年）では擬声語をほとんど用いていないが、口語体で書いた『半日』（一九〇九年）、『杵杓・セクスアリス』（一九〇九年）及び『雁』（一九二一〜一九一三年）では比較的多く使用していると言える。同様に、尾崎紅葉の場合も、文語文による『金色夜叉』（一八九七〜一九〇二年）と、口語文の『多情多恨』（一八九六年）を比較すると、後者において擬声語をより多用していることがわかる。

擬声語は近代文学において多く用いられたが、擬声語は当時の文壇を支配した自然主義による無技巧論に背反しなかったこと、現実の状況を細密に模写できるものとして当時の文章にかかせないものとされていたこと、実生活を表現できる俗語としてよく愛用

されていたこと、の三点がその主な理由として挙げられる。

しかし、擬声語は小説だけに多用されたわけではない。むしろ、擬声語の表現性が最も發揮されたのは詩であろう。この発表では、特に自由詩に焦点をあて、そこに見られる擬声語の表現性を考察する。

自由詩における擬声語について

自由詩においては口語体化の進行に伴っての擬声語の増加、及びその用法の多様化、また擬声語による様々な修辭的効果が得られるようになったことが、最も注目し得る点である。

ちなみに、詩における言文一致運動は、一八八二年に新体詩の提唱によって始まったとされている。この年に刊行された『新体詩抄』では、新しい詩の誕生のために、次の二点が提唱された。

- (1) 用語の範囲を拡大し、俗語を取り入れて、読者に理解しやすいようにすること。
- (2) 和歌、俳句、漢詩のような従来の詩形では表わせないことを表現すること。(羽)

生康二『口語自由詩の形成』雄山閣、一九八九年、六頁。

上記の二点から明らかなように、「平俗性と即物性と直叙性によって、オノマトペ（すなわち、擬声語）は、新体詩語の資格を賦与された」のである（塚原鉄雄「近代詩人とオノマトペ」『言語生活』第二七三号、一九七四年六月、四頁）。その上に、定型詩の制約を持たない自由詩では、擬声語は自らの生産的品格を発揮し、三・四音節の語だけでなく、十音節以上の形態をなすものも多く見られるようになった。このような珍しい形態は、定型詩においては制限されていたが、制約を持たない自由詩では使用され得るものであった。

詩の口語体化の進展につれ、擬声語がより多用されるようになったことは、口語自由詩の完成者とされる詩人の中によく見られる現象である。例えば、高村光太郎の場合、「『道程』の詩編を書いていく過程で、光太郎は文語から脱却し口語へと移行した」と既に指摘されている（羽生康二『口語自由詩の形成』一一八頁）。『道程』は一九一〇年から一九一四年にかけて書かれた詩集であるが、一九一〇年の他の作品と『道程』とを比較してみると、光太郎が口語体へ移行する段階で擬声語の語数が増加することがわかる。とりわけ、一九一二年に書かれた「雨」及び一九一三年に書かれた「牛」、「山」、「粘土」

などでは同様な現象が見られる。同じく、石川啄木の場合、一九〇五年の『あこがれ』と、彼の最も口語的な詩集とされている『心の姿の研究』（一九〇九年）、『呼子と口笛』（一九一三年）及び書簡・日記中の詩とを比較すると、後者で擬声語がより多く使われていることがわかる。さらに、萩原朔太郎の場合も、口語自由詩の画期的な作品とされている『月に吠える』（一九一七年）及び『青猫』（一九二三年）では、擬声語が圧倒的に多い。しかし、それ以前の少年時代の作品『愛燐詩篇』と、文語帰りの作品とされる『郷土望景詩』（ともに一九二五年の『純情小曲集』に所収）とにおいては、擬声語の使用率がそれほど高くない。つまり、この三人の詩人において、文語から口語への移行は、擬声語の採否に関連してくるのである。

自由詩の中で擬声語が多くなおかつ巧みに使用されていることは、既に指摘されている（小嶋孝三郎『現代文学とオノマトペ』桜楓社、一九七二年及び大坪併治『擬声語の研究』明治書院、一九八九年を参照）が、この発表ではどのように使用されているのかに特に焦点を当て、考察を進めることにする。

自由詩においては、擬声語の反復が最も頻繁に見られる修辭的操作のひとつである。とりわけ、自由詩作家の代表的存在であった萩原朔太郎や北原白秋は、反復法をよく採用し、擬声語を意識的に特定の位置で用いることによって印象的な平行法的効果を作り

出している。ここで反復法の一つである結句反復の例をあげておく。

しのめきたるまへ

家家の戸の外で鳴いてゐるのは鶏です

声をばながくふるはして

さむしい田舎の自然からよびあげる母の声です

とをてくう、とをるもう、とをるもう。

朝のつめたい臥床の中で

私のたましひは羽ばたきをする

この雨戸の隙間からみれば

よもの景色はあかるくかがやいてゐるやうです

されどもしのめきたるまへ

私の臥床にしのびこむひとつの憂愁

けぶれる木木の梢をこえ

遠い田舎の自然からよびあげる鶏のこゑです

とをてくう、とをるもう、とをるもう。

(後略)

(萩原朔太郎「鶏」「青猫」)

結句反復とは、句や節及び文の末尾の重要な語句を後続する句や節及び文の末尾で繰り返す表現法であるが、上記の詩の場合、擬声語を規則的に詩節末に配列することによって、結句反復による平行法的効果が生み出されている。実際、朔太郎は、詩の中で同様な擬声語の反復を特に好んでおり、この他にも例えば「軍隊」や「遺伝」(ともに『青猫』に所収)の中でそれぞれ「づしり、づしり、ばたり、ばたり」、「ざつく、ざつく、ざつく、ざつく」や「のをあある とをあある やわあ」を規則的に各節末で繰り返している。また、規則的ではないが、たとえば「雲雀の巢」(『月に吠える』)及び「薄暮の部屋」(『青猫』)の中でもそれぞれ「びよびよびよ」と「ぶむぶむぶむ」を幾度か繰り返しており、朔太郎においてはこのような擬声語の使い方がひとつの特徴になっていると言えよう。つまり「象徴詩を作るほどの人は文字の視覚に注意する以上に『言葉の音楽』に注意してもらひたい」(「朔太郎の感想」『感情』第十号、一九一七年五月)と述べた朔太郎にとって、擬声語の反復による効果は、視覚的效果あるいは心象伝達効

果に加えて、音声上の効果という観点からも極めて重要なのである。

時代が少々隔たるが、詩節末に規則的に擬声語を配列することは、例えば、草野心平にもよく見られる修辭的操作である。

寒い鉛の天の下を。

まつ北からの風のなかを。

まるで違つた

もうあの時の顔々でない。

ざつく。ざつく。ざつく。

ざつく。ざつく。ざつく。

ざつく。ざつく。

靴音は高いがしづかである。

疲れも興奮も…しづかである。

湖に沈む雪のやうなあんなしづけさ。

これはもうただのしげきでない。

ざつく。ざつく。ざつく。

ざつく。ざつく。ざつく。

ざつく。ざつく。

自分を見た。

山形や秋田や岩手の汽車のなかから

もんぺの女たちが窓々の兵士にお茶を出すのを。

刈入れの百姓が稲の束と鎌とを高く振り上げて見送ってゐるのを。

胸々の潮ざると高鳴りと崩れ渦巻く興奮とを。

停車場毎の旗と楽隊と万歳と天によぢのぼる大鯨波を。

ざつく。ざつく。ざつく。

ざつく。ざつく。ざつく。

ざつく。ざつく。

(後略)

(草野心平「凱旋部隊」『絶景』一九四〇年)

遠い深い重たい底から

暗い見えない涯のない過去から

づづづづ わーる

づづづん づわーる

ぐんうん うわーる

黒い海はとどろきつづける

黒のなかに鉛色の波がうまれ。

鉛色のたてがみをしぶかせて波はくずれ。

しめつばい渚に腹ばつてくる。

鉛の波は向うにも生まれ。

そして黒汁色に吞まれてしまう。

けれどもまた現われて押よせてくる。

づづづづ わーる

づづづん づわーる

ぐんうん うわーる

(後略)

(草野心平「夜の海」『マンモスの牙』一九六六年)

上記の例からわかるように、擬声語の規則的反復は心平においても特徴的な表現法の一つであるが、似たような用い方は、大正時代の詩人、山村暮鳥の詩にも見られる。

ひまはりはぐるぐるめぐる

火のやうにぐるぐるめぐる

自分の目も一しよになつてぐるぐるめぐる

自分の目がぐるぐるめぐれば

いよいよはげしく

ひまはりはぐるぐるめぐる

ひまはりがぐるぐるめぐれば

自分の目はまつたく暈み

此の全世界がぐるぐるどめぐりはじめ

ああ！

(山村暮鳥「歡樂の詩」『風は草木にささやゐた』一九一八年)

上の例では、暮鳥は、同じ擬声語を各行末で幾度か繰り返している。一方、以下の詩では首句反復による平行法的効果が見られる。北原白秋の作品である。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。

春はふけ、春はほうけて、

古ぼけた草家の屋根で、よ。

日が啼く、白い野鳩が、

啼いても、けふ日は逝つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。

庭も荒れ、荒るるばかりか、

人も来ぬ葎が蔭に、よ。

茨が咲く、白い野茨が、

咲いても、知られず、散つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、

おお、ほろほろ。

何を見ても、何を為てもよ、

ああいやだ、寂しいばかりよ。

椅子か揺れる、白い寝椅子が、

寝椅子もゆさぶりや折れて了ふ。

(後略)

(北原白秋「野茨に鳩」『水墨集』一九二三年)

首句反復とは、文頭や行首を以下の節頭や行頭において繰り返す表現法である。白秋

は春の田舎家の風景の中に亡びゆくものの哀感を描くことによつて自らの胸に宿る普遍的虚無感を表現しているのである。けだるい春の日に漂う倦怠感が巧みに象徴されている。このような風景の中で鳩の鳴き声が聞こえてくる。その鳴き声を摸写する「ほろろん、ほろろん」が規則的に各連（この詩は十一連から成っているが）の冒頭で繰り返されており、首句反復による平行法の効果が生み出されることになる。

一方、行や句、節の最後のあるいは重要な語を以下の節や行の初めで繰り返す表現法は前辞反復と言う。ここでは白秋作品のなかの二例を挙げる。

（前略）

その頭は空虚の頭、

白いお面がころころと、ころころと……

ころころと転ぶお面を

わかい男が待ち受けて、

（後略）

（北原白秋「人形づくり」『思ひ出』一九二一年）

ほの青い雪のふる夜に、

電車みちを、

酔つて、酔つて、酔つばらつてさ、ひよろひよると、

ふらふらと、凭れかかれば、硝子戸に。

Yoi!.....Yoi!.....Yoi!.....

(北原白秋「柳の左和利」『東京景物詩及其他』一九二二年)

前辞反復は主題を強調する役割を果たす技法である。散文では、前句末で使用された表現を反復して後句を始めるのは、不協和音的効果を引き起こすこともあるため、一般的に避けられているが、詩においては特にリズムとポーズを強調できる操作としてよく使用される。上記の例では、「人形づくり」の場合、「ころころ」という擬声語が二節にわたって繰り返されている。それに対し、「柳の左和利」の場合、「ふらふら」が前句の「ひよろひよろ」に交代して用いられている。後者では、使われている擬声語が異なるので、完璧な前辞反復としては認めたいが、白秋においては、まったく同一の擬声語ではなくても、擬声語を用いて節を結ぶ、あるいは前句と後句をつなげるという特徴がある。

次に、一語反復という表現法の二例をあげておく。

ち、ち、ち、ち、と、ものせはしく
刻む音：

(後略)

(北原白秋「雨の日ぐらし」『邪宗門』一九〇九年)

ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよと
空では雲雀の親が鳴いてゐる。

おれはかはいさうな雲雀の巣をながめた。

(後略)

(萩原朔太郎「雲雀の巣」『月に吠える』一九一七年)

またも時代がさがるが、草野心平には、次のような興味深い詩がある。

(前略)

しんしんしんしん
しんしんしんしん

しんしんしんしん
しんしんしんしん
しんしんしんしん
しんしんしんしん
しんしんしんしん
しんしんしんしん
しんしんしんしん
しんしんしんしん

草野心平「汎神論に雪が降る」『凸凹』一九七四年

一語反復とは、「ち、ち、ち、ち、」 「ぴよ、ぴよ、ぴよ、ぴよ」のように接続詞を省略して語句を繰り返す表現法である。これは定型詩である俳歌ではあまり見られない表現法であったが、制限を持たない自由詩には最も見られる技法の一つとなった。

次の詩は、擬声語の反復による交錯配列法的効果が見られる一例である。

ほの青い雪のふる夜に、

電車みちを、

酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ひよろひよろと、
ふらふらと、凭れかかれば、硝子戸に。

Yoi!..... Yoi!..... Yoitonal!.....

ほの青い雪はふり、

店の中ではしんみりと柳の左和利、

酔つて、酔つて、酔つぱらつてさ、ふらふらと、

ひよろひよろと首をふれば太棹が……

Yoi!..... Yoi!..... Yoitonal!.....

(後略)

(北原白秋「柳の左和利」『東京景物詩及其他』)

交錯配列法とは、同一あるいは類義の語をA B B Aの形式で繰り返す表現法である。「柳の左和利」では、第一節の「ひよろひよろ」「ふらふら」が第二節では交代して「ふらふら」「ひよろひよろ」という順番で用いられている。

一方、次の詩では擬声語の反復による頭韻法の例が見られる。

(前略)

たとへば蛾蝶のごときものさへ、

そのうすき羽は卵にてかたちづくられ、

それがあのやうに、ぴかぴかぴかぴか光るのだ。

(後略)

(萩原朔太郎「春の实体」『月に吠える』)

ふんふん ふんふん

ふんふん ふんふん

シヤシヤシヤシヤ

シヤシヤシヤシヤ

シヨビ シヨビ シヨビ シヨビ

シヨビ シヨビ シヨビ シヨビ

ぼつし ぼつし ぼつし ぼつし

ぼつし ぼつし ぼつし ぼつし

しんしんしんしん

しんしんしんしん

しししししししし

しししししししし

(後略)

(草野心平「汎神論に雪が降る」『凸凹』)

頭韻法とは、二語以上の初めを同音または同字にして繰り返す表現法である。通常言語では同音の連続は不快音調を生み出すことが多く、一般には避けられているが、擬声語においてはこういった同音の連続は、よく見られるものである。例えば、上記の朔太郎の詩では、朔太郎自身の特異な感覚が捉えた春の「実体」が描かれている。朔太郎が捉えた春の実体は卵である。春を作っている桜の花、柳の枝、蛾蝶などはすべて卵から

生み出され、その卵は空気の中にも見出される。朔太郎がここで「ぴかぴかぴかぴか」という擬声語に「光る」を並列したことによって、軟口蓋の無声破裂音 /k/ が繰り返され、頭韻法の効果が生じるのである。

この他にも、近代の自由詩には擬声語の使用による様々な修辭的效果を見出すことができる。そして、これらの修辭的效果は反復法によるものばかりではない。例えば、轉義の領域の中に分類される直喩、隱喩、擬人法などもよく見られる表現法である。まず直喩としては以下の一例をあげることができよう。

(前略)

こんなさびしい風景の中にうきあがつて、

白つぼけた殺人者の顔が、

草のやうにびらびら笑つてゐる。

(萩原朔太郎「酒精中毒者の死」『月に吠える』)

直喩は「AはBのようである」という形式を取るが、上記の朔太郎の詩では、殺人者の笑う様子と草の間に類似点が見い出され、直喩で表わされているのである。一方、次

の詩では、隠喩の一例が見られる。

(前略)

それらはじつにちつぽけな

あるかないかも知れないぐらゐ芽生の子供たちだ

それがこんな麗らかな春の日になり

からだ中びよびよと鳴ゐている。

(萩原朔太郎「春の芽生」『蝶を夢む』一九三三年)

隠喩は「AはBである」という形式であるが、AとBの間に類似点が認められた時に、AをBに喩えて表現することによって隠喩的な意味が生じるといふ。上記の例では、朔太郎は芽生と小鳥との間に類似性を発見したので、通常小鳥、ひよこ等の場合に使用される「びよびよ」という擬声語を用いた。つまり、この例では、芽生は小鳥に見立てられ、そこに「びよびよ(と鳴く)」という表現が用いられたことによって隠喩的效果が生じたのである。

最後に、朔太郎における擬人化の一例をあげておく。

まつくろけの猫が二疋、

なやましいよるの家根のうへで、

ぴんとたてた尻尾のさきから、

糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

『おわあ、こんばんは』

『おわあ、こんばんは』

『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』

『おわああ、こここの家の主人は病氣です』

(萩原朔太郎「猫」『月に吠える』)

この詩において、朔太郎は猫の鳴き声を擬声語によって再現しているが、描かれている猫達の会話そのものが一つの擬人化の試みであると見ることができよう。

以上、擬声語が自由詩の中で多数かつ巧みに使用されていることを述べた。自由詩の代表的詩人にとって、擬声語は俗語として日常性を表現できるものであるとともに、詩的表現として詩人の内面生活を叙情的に表現できる言語操作であり、また、詩においても口語化が進む中で詩人にとって「近代性」を表わすための一つの表現手段であったの

である。

先行研究では、描写が細かく具体的になつてきた近代の文章表現では擬声語の使用率が増加したとの指摘はすでに散見されるものの、何故擬声語が近代の文章表現において多く使用されているかについては解明されないままであった。よつてこの発表では、試みとして次の点を挙げた。まず、擬声語はすでに俗語を重視した近世文学の表現手法の一つであつたこと、その後新式文章では近世文学で多用された修辭的技巧がおおむね徐々に姿を消していったのに対して俗語的表現である擬声語はそのまま使ひ続けられ、近代の文章表現の特色の一つともなつていったこと、そしてその主な理由として、擬声語が自然主義の無技巧論に背反しないものとして多くの文学者に評価され、広く使用されたこと、である。

一方、擬声語の増加は近代文学の特有な表現形態であつた自由詩にも見受けられることも述べた。擬声語の問題は、個人の好みや選択に深く関わるものであるので、如何なる時代であつても作品や作家によつて擬声語が多く用いられることもあれば、ほとんど用いられない場合もある。しかし、自由詩は定型詩と異なり何ら制約が無いゆえ、当時の多くの作品において、擬声語が単なる言語操作ではなく、「近代的」表現として用いられたのである。つまり、擬声語は詩人の内面の言語記号化の手段として、必然的選択

によって用いられる、すなわち必要不可欠なものとなつていったと言えよう。

発表を終えて

平成九年に名古屋大学大学院文学研究科にて博士号を取得することにより、私の日本での八年間の留学生活は終わりました。同時にアメリカの大学での奉職が決定し、日本を離れることになってしまいました。

離日後五年が過ぎて初めて日本で長期間滞在の機会を得ることができました。振り返ってみれば、わずか半年あまりの滞在でありましたが、自然豊かな国際日本文化研究センター（日文研）にて研究に専念しながら、京都という伝統のある素晴らしい街で生活を家族とともに過ごすことができ、私にとって生涯忘れられない半年になりました。

また、滞在中には国際交流基金での発表の機会を与えられたことに感謝しております。現在の私の主要研究テーマは近代日本の修辞学史ですが、大学院時代から関心のあった修辞の一つである擬声語について日文研フォーラムの場にて研究成果を発表できたことは、誠に光栄なことでもあります。

最後に、滞在中、貴重なお時間を割き私を御指導してくださった鈴木先生に深く感謝の意を表わさせていただきます。国際交流基金での発表の際、貴重なコメントおよび御指摘を頂いた光田先生、そして私の滞在中の研究・日常生活をサポートして頂いた日文研・研究協力課の皆さんにこの場を借りてお礼を申し上げたいと思います。



日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORI β EN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー・A・トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Chil 宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11	スーザン・J・ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ・C・ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSLA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモント Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に来た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10	Li Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウィーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
31	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンベルの上洛記録」
33	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」
35	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
36	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 晓平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
37	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HOONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウイシュワナタン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン=ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシェ・ボハックヴァ Libuše BOHACKOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McARTHUR (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳: アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST Ⅲ (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロープ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム・D. ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ・L. シュレストハ Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐって—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon-Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科举制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステワ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	<small>マイヤ・ゲラシモワ</small> Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	<small>オギュスタン・ベルク</small> Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12	<small>リチャード・トランス</small> Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	<small>シルバーノ D. マヒウォ</small> Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	<small>Liu Jian Hui</small> 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	<small>チャールズ J. クイン</small> Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	<small>フランソワ・マセ</small> François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥8	6.11.15	<small>Jia Hui-xuan</small> 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	<small>PENG Fei</small> 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦0	7. 1.10 (1995)	<small>ミハイル V. ウスペンスキー</small> Michail V. USPENSKY (エルミターージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミターージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦1	7. 2.14	<small>YAN Shao Dang</small> 嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミーラ・エルマコワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kil-Sung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SU Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	LI Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモニデス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤナ・ソコロワ・デリュシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

84	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5.28	マーク・コウデイ・ポールトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タバブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Sylvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
89	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に來日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレクサンダー N. メシエリャコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
94	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケレ F. マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	キンヤ TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーゼン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キンヤ TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

104	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
108	10. 6. 9	Hiroshi SHIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
109	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リューネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
111	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
112	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
114	11. 1.12 (1999)	DU QIN 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪①⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪①⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪①⑧	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖頌陵詩」
119	11. 6. 8	マリヤ・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑪①⑩	11. 7.13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑪①⑪	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑪①⑫	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑪①⑬	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑪①⑭	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ マリア・トレンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユウスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

⑬③⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
⑬③⑧	13. 4.10	LI Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
⑬③⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
⑬④①	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
⑬④②	13. 9.18	ジョナサン M. オーガステイン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における「近親婚」と中国の「同姓不婚」との比較」
145	13.12.11	チグサキムラステイブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑬④③	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

⑭	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マシ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 恵卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウエイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光潯 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
⑮	14. 6.11	LU Yi 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	YEE Mimi 李 美林 (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」
154	14.10. 8	マルクス リュッターマン Markus RUETTERMANN (日文研外国人研究員) 「伝授から伝統へ—中・近世日本における「啓蒙」の一面について」
155	14.11. 5	KIM Moon Gil 金 文吉 (韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員) 「神代文字と日本キリスト教—国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン バーンズ Susan L. BURNS (米・シカゴ大学 準教授・日文研外国人研究員) 「問題化された身体—明治時代における医学と文化」

157	14. 1.14	<small>デビッド ハウエル</small> David L. HOWELL (米・プリンストン大学外国人研究員・日文研外国人研究員) 「天保七年常州那珂湊仇討ち一件顛末」
158	14. 2.18	<small>Zhan Xiaomei</small> 戦 曉梅 (日文研研究機関研究員) 「隠逸山水に秘められた『近代』」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2003年3月31日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048
ホームページ : <http://www.nichibun.ac.jp>

© 2003 国際日本文化研究センター

■ 日時
2002年 2月12日 (火)
午後 2時～ 4時

■ 会場
国際交流基金 京都支部

國家圖書館藏